

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2023

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2023



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

はじめに

コロナ禍も開け、キャンパスに学生たちの声が戻ってきた。彼らは同じ空間の中で一緒に考え、つくることの楽しさを思う存分味わったと思う。建築や街、ランドスケープを相手にする私たちにとって、リアルな空間の可能性を再認識できたことは大きかった。

同時に、オンラインとリアルを組み合わせ、多彩な授業やコミュニケーションの実践も行われた。新たな学びの試行錯誤は、今後の大学の可能性を拡張しただろう。

理論と実践を同時並行で行うこの学科の特徴は、この年もさらに加速した。

地元の企業や行政との共同プロジェクトの機会は増え続けた。学生たちは街に飛び出し、社会と関わりながら、この場所でしかできない多様な活動を行っている。

例えば、地元企業とのコラボレーションにより大学周辺の空き家を学生のデザインで再生する空き家活用プロジェクト。街中の歩道に家具や屋台、遊具などを置いて新たな居場所を作り、街の風景を豊かにするストリートリノベーションプロジェクトなど。

学生たちはチームをつくり、助け合い、時にぶつかりながら共同で物事を進めることの意味を学んでいる。地域社会との距離が近い、この大学でなければ体験できないことだ。

2023年の世界に目を向けてみれば、ウクライナやパレスチナでは戦争を続き、グローバルイズムの崩壊を感じざるを得ない。だからこそ、ローカルに立脚することの大切さに、私たちは気がついている。

今だからこそ、落ち着いて、素直に大地を意識しながら世界のあり方について考えたい。その場所ならではの街や建築、さらに環境やランドスケープについて考え、行動する。

この学科ではこれからも、学生たちとともに新たな理想の風景を追求し続けたいと思う。

(馬場正尊)

目次

特集

これまで行政主導のまちづくりから、欲しい暮らしを自ら創出しようとする民間主導のまちづくりが全国各地で取り組まれています。そのような民間主導のまちづくりの仕掛け人 加藤優一先生が2023年春に着任されました。

今号の年報は、『暮らしづくり』のすすめ』と題し、加藤優一先生のこれまでの活動に触れ、今後のまちづくりについて考えてみたいと思います。

建築・環境デザイン学科 加藤優一先生インタビュー 6
『暮らしづくり』のすすめ

教育報

年度ごとに、演習課題を中心とする教育の成果をまとめています。

1年生では、前期に造形や表現の基礎となるデッサンや立体造形、インテリア空間の造形トレーニング、後期に設計の基礎となる図学・製図、CADの習得や施工体験といった演習を設定しています。

2年生は、木造軸組構造から成るタイニーハウスの設計を通して木造建築の構造の基本と応用を学ぶ演習から始まり、続いてフィールドワークによって地域の問題を探し出し、さらに事業モデルの検討、提案といったまちづくりに関する一連のデザインについて学びます。後期には、住宅とその周囲に展開するランドスケープを続けて設計し、建築とその周囲の環境を一体的に計画します。1年を通じて建築と環境をひとつながりのものとして総合的に考える課題を設定しています。

3年生は、2年生での総合的演習を踏まえ、前期前半/後半、後期前半/後半の4つの期間のなかで、各自の興味や関心、進路に併せて演習課題を選択します。建築、ランドスケープ、都市や集落のリサーチ、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題を設定し、地域の様々な問題に目を向け提案につなげてゆきます。

4年生ではこうした学びを経た集大成とし、各自が課題を探り、調査・研究を行い、卒業論文、あるいは卒業設計へとまとめてゆきます。

1学年	建築・環境基礎演習 建築・環境施工演習	10
	インテリア基礎演習	11
2学年	タイニーハウスの設計 フィールドワーク入門	12
	住宅の設計 住宅のランドスケイプデザイン	13
3学年	エコタウンの設計 実践的まちづくり演習	14

リノベーション演習 農村計画	15	「未来に続く古民家」 住宅の部分断熱改修における改修効果と 改修プラン考案に関する研究	22
構造デザイン	16	豪雪地帯における 持続可能な木造耐雪住宅の研究	23
ドイツ・山形の都市分析と サステイナブルプランニング			
天童市図書館の設計 ランドスケープ総合デザイン	17	プロジェクト 山形R不動産 リノベーション	23
		JA山形市エコリノベーションプロジェクト ストリートリノベーションプロジェクト	24
		プロジェクト ツリーハウス セルフビルド	25
		プロジェクト 早戸温泉環境整備実習 環境	25
		只見町周辺環境整備実習	26
		プロジェクト 鮭川村空き家等利活用プロジェクト 地域との連携	26
		空き家活用プロジェクト	27
		各種講演会 環境的未来型 今野千恵氏 環境的未来型 平本知樹氏	27
卒業研究・設計 建築物における豊かさの正体	18	ワンデイプロジェクト 板坂留五氏	28
やまがた省エネ健康住宅の快適性と エネルギー利用の実態	19	コンクール等 受賞者の紹介	28
家具以上建築未満による、 住み手が更新していくプロセスの提案		芸術工学会	29
形ないものを形作る 総評	20	第1回 タカカツグループ 学生住宅設計アイデアコンペ 宮城の家づくり2023	
修士研究 日英の住宅における 庭の使い方に関する研究	21	執筆活動 銭湯から広げるまちづくり 多拠点で働く 都市を学ぶ人のためのキーワード事典 2020年代のまちづくり	30

研究報

学生生活の集大成となる卒業研究・設計、修士研究・設計は、学生たちが自ら社会の様々な課題を見つけ出し、それと真摯に向き合い調査・分析を通して、論文あるいは設計というかたちでまとめます。ここでは、1年間を通して課題に対峙し、提案された研究成果をレビューします。

併せて、各研究室や学生・有志による地域と密着したプロジェクト、学科で主催した各種講評会の概要、学生たちの学外でのコンペティションで得た評価等についてご紹介します。



開学30年を迎える東北芸術工科大学の、未来に向けた新たな行動指針として「TUAD vision 2024」が発表されました。その中で、馬場正尊教授が提唱する「クリエイティブ・ローカル」という言葉がピックアップされています。「突き抜けたクリエイティブは、人口減少とともに既存にシステムに隙ができた「ローカル」にこそ生まれる/そのような新たな「地方」の風景

—加藤先生は専門領域としては「まちづくり」に軸足を置いていらっしゃるかと理解しています。一方で、いまお邪魔しているこの建物（「小杉湯となり」）もとても面白い建築物なのですが、個別の建築空間を良いものにしたというモチベーションも強く持っている方とお見受けして、意匠設計者の私としては勝手に親近感を抱いています。まず初めに、今の加藤先生が昔はどのような学生で、どうやって今に至ったか、経緯を教えてくださいか？
加藤 学生時代から話すと、長くなりますけど（笑）

—加藤先生の現在の活動の中に「ローカル」から未来を切り拓くための鍵があるのではと見えています。先生の歩いてきた道は、芸工大の学生さんにとって重要なロールモデルになると思いますので、ぜひ。
加藤 まず、「まちづくり」には様々なアプローチがありますが、私自身は「小さな場づくりを街に拡げていく」という方法で取り組んでいるので、建築と都市をひとつながりのものとして考えています。また、その実現のために、建築の企画・設計・運営というプロセス全体に関わることを大切にしています。

を描こう」といった意味のスローガンですが、このフレーズを聞いて最初に思い浮かんだのが、加藤先生の活動でした。加藤先生の芸工大とは別のもうひとつの活動拠点「小杉湯となり（銭湯に隣接したシェアスペース）」を訪れて、「未来」の在り処について伺いました。

現在に至った経緯としては、幼少期に遡ります。当時、『がんばれゴエモン』という江戸時代を舞台にしたTVゲームに熱中していて、ゲームの街並みを大きな紙に何十枚も模写していました。その後は、友達にその街を体験してもらって遊びを考えるなど、その頃からまちづくりに興味を持っていた気がします（笑）。

—ゴエモン（笑）。たしかにあれは面白かったですよ。

加藤 銭湯の活動を行っている理由も幼少期にあります。出身が山形県の新庄市なのです

が、山形には各市町村に温泉があって、物心ついた頃には父親と一緒に日帰り温泉に通っていました。

—なるほど、三つ子の魂ですね。大学は、どうやって選択されたのですか？

加藤 大学は興味があった建築設計を選択し、大学院では視野を広げて都市デザインを専攻しました。そこで、学生ながらに建築分野と都市分野の間に隔たりがあることに気づきまして。街のことを考えた建築をつくるには、どうすればいいか？ 建築を設計する前段階のデザインが重要なのではないかと考えるようになり、その分野を研究している東北大学（小野田研究室）進学することになりました。その直後に東日本大震災が起り、被災自治体に向向して災害公営住宅を作るプロセスを経験することになります。

—もはや運命ですね。大変なお仕事だったと想像します。

加藤 本当に大変な状況でしたが、建築をつくる前段階の組織づくりや計画プロセスの大切さを実感する貴重な経験にもなりました。—ものづくりの上流に切り込んで、建築と都市を繋げる重要なアプローチですね。一方で、小野田さんの取り組みは、加藤さんの現在のスタイルとは少し違うように思います。

加藤 はい。研究室では規模の大きな公共事業を扱うことが多かったのですが、もう少し身近な場所で実践するには、民間の力が必要だと感じたんです。そこで大学を出た後は、馬場先生の設計事務所で公民連携事業に関わったり、地元で空き家再生の法人を立ち上げたり、活動の幅を広げていくことになりました。—ここだと思ったところに次々と飛び込んでこられたのがとても印象的です。

加藤 「良い空間をつくるために、プロセス全体をデザインしたい」という気持ちは常にあったので、その時やるべきことに素直に取り組んできた感じですね。建築と都市を学んで、その間をつなぐ研究をして、行政での実践の次に個人でもチャレンジする、というように。

—学生さんにも勇気を与えるお話ですね。

加藤 迷ったら「まずはやってみる」ことをオススメします。最初からやりたいことが見つからなくてもいいので、ピンときたことや機会が恵まれたことをやりきってみる。最終的には必ず全てが繋がってくるので。先が見

えづらい社会ですし、動きながら考えていく方が時代に合っているのではないのでしょうか。—同代的に非常に共感します。その時期に設計からまちづくりのような領域に移行していった感じでしょうか。

加藤 そうですね。ただ実は「まちづくり」をやっているという感覚はあまり無いんです（笑）

—それは失礼しました。実は、そこを掘り下げたいと思って今日は来ました。

加藤 「まちづくり」というと色々な捉え方があるし、行政や専門家が行うものだと思っている人もいますが、一人ひとり小さな行動の積み重ねが街をつくっている。なので「暮らしづくり」や「場づくり」の延長上で「まちづくり」を捉えるようにしています。

—「小杉湯となり」のコンセプトとしても読めるような価値観です。「小杉湯となり」をつくった経緯も教えて下さい。

加藤 この場所をつくった理由も、自分の暮らしづくりの延長にあります。きっかけは2017年だったと思います。設計事務所で働くために、東京の高円寺に引っ越して、たまたま近くにあった銭湯が「小杉湯」でした。しばらく通っていると番台でオーナーと雑談するようになり、ある日「銭湯の隣に1年後に解体予定のアパートがあるので、活用して欲しい」と頼まれたんです。銭湯が大好きですから、これはチャンスだと思い、一晩で企画書を書き上げてプレゼンしたところ「面白い企画なので無料で使っていいよ！」とってくれました。

—まちのポテンシャルを象徴するような良い話ですね。ちなみにそれは、まだ加藤先生が設計事務所に在籍中のお話ですか？

加藤 そうです。最初はライフワークとして活動していました。10部屋の風呂なしアパートだったのですが、各部屋に異なるタイプのクリエイターに住んでもらい、銭湯を盛り上げたら面白いのでは？と考えました。そこで「風呂なしアパート」から「銭湯つきアパート」と名前を変えて募集したところ、すぐに10人集まりました。それから1年間、ミュージシャンが部屋で作曲して銭湯でライブをしたり、アーティストが「アーティスト in 銭湯」と称して滞在創作を行ったりと、面白い取り組みが数多く生まれました。



(上から)
幼少期のスケッチ
復興事業のワークショップ
設計事務所時代の作品「旧富士小学校の再生」
新庄市での空き家再生事業「万場町のくらし」
小杉湯での加藤先生



銭湯つきアパート

—企画の完成度が高い! 事業化待ったなしですね。

加藤 事業のヒントもたくさんあったのですが、一番良かったのは、毎日銭湯に入る生活そのものでした。忙しい日々の中でも、1日1回はスマホから離れて自分を労る時間ができたり、言葉を交わさなくても人とのつながりを感じたり。結局アパートは解体されてしまったのですが、この暮らし方を多くの人に伝えたいと思い、アパートの解体跡地に「小杉湯となり」をつくることになりました。こういう場合、一般的にはオーナーである小杉湯が運営することが多いのですが、アパートの元住人で会社を立ち上げて、新しい建築を企画・運営することになったんです。コンセプトは「銭湯のある暮らしを体験できる場所」で、1階をキッチンとリビング、2階をワークスペース、3階を個室にしまし



銭湯でのイベント

た。湯上がりにくつろいだり、食事や仕事をしたり、もう一つの家のように使える場所です。また、銭湯のように地域に愛される場所を目指して、色々な人を巻き込んできました。設計では、他の設計事務所やグラフィックデザイナー、家具の職人さんなどとコラボレーションしています。運営でも、20代から80代までの多世代のスタッフがいて、ボランティアメンバーを合わせると50人以上が関わっています。

—プロジェクトの進め方やチームの作り方に、加藤先生のリーダーとしての特質やスタイルがあらわれているのかなと思いました。加藤 ジャンルによって自分より「得意な人」がたくさんいますし、自分だけでは想像できないデザインが生まれる瞬間が好きなんですよね。デザインと言っても視覚的なものだけではなく、運営の仕組みや地域との関係性な

ど、その対象は無限大ですからね。

—その考え方も含めて、非常に良い結果に繋がっているようにお見受けしました。「小杉湯となり」は言わずもがなですが「銭湯ぐらし」というネーミングも素晴らしいですね。人と人をつなげる「水」の想像力、的を絞ることで名前の中でブランディングを行っている点、上手いです。

加藤 「銭湯ぐらし」という名前はアパートに住んでいた編集者のアイデアです。「小杉湯となり」は「小杉湯」の隣にあるので分かりやすさを重視したこともあります。小杉湯〇〇」という拠点が街に広がってほしいという意味も込めています。実際に拠点ができていて、空き家を活用して「小杉湯となりーはなれ」や「銭湯つきアパート第2号」を開業しています。その結果、街全体を家のように楽しめる状況が生まれていて、「小杉湯



小杉湯となりの計画図



小杉湯の玄関入口

が街のお風呂だとすると、「小杉湯となり」が台所や書斎、「銭湯つきアパート」が寝室のように使われています。

—まさに「銭湯ぐらし」が地域に広がっていますね。今後、この活動の領域を他の地域に拡大していくビジョンはお持ちですか？

加藤 小杉湯を起点にした拠点づくりは半径500mくらいの範囲がちょうどいいと思っていますが、連携する拠点は全国に広がっています。例えば長野に「小杉湯となり一別荘」ができました。これは「小杉湯となり」の元利用者が、長野に移住する際に立ち上げてくれたもので、高円寺における街と人の関係性が広がった結果です。

ただ、プレイヤーとしてどこまで関わられるか？という話は別の話になります。私は山形でも法人を設立して空き家再生に取り組んでいますが、高円寺にも山形にも家があるので実感を持ちながら関わることができます。運営まで関わるとしたら、その2地域が限界ですかね。企画や設計だけであれば他の地域に関わることもあります。その場合は地域のプレイヤーと一緒に取り組むようにしています。

—東京と山形の二拠点も大変だと思いますが、2つの場所で事業をやる上でやり方を変えていることなどはありますか？

加藤 色々な違いはありますが、アプローチは同じですよ。

—そうなんですか？ 私は東北エリアと関東

エリアの両方で建築設計の仕事をした経験がありますが、何かしら取り組み方を変えないといけないような感覚を抱いていたため、加藤先生の回答にとっても驚いています。

加藤 自分が住んでいるエリアであれば、自分がつくりたい暮らしは見えてくるし、他のエリアでも、地域の人の暮らしに向き合えば、自ずと課題と可能性が見えてきます。それが、まちづくりの一步であり、アプローチは東京でも山形でも変わりません。ちなみに建築の設計でも、お施主さんの暮らしや街との関係性を考えますよね？それも、まちづくりの一つだと思っています。とは言え、このアプローチにもスキルが必要なので、芸工大で担当している演習（フィールドワーク入門）では、実際に街を歩き、地域の人に話を聞いた上で、提案をまとめる流れを体感してもらっています。

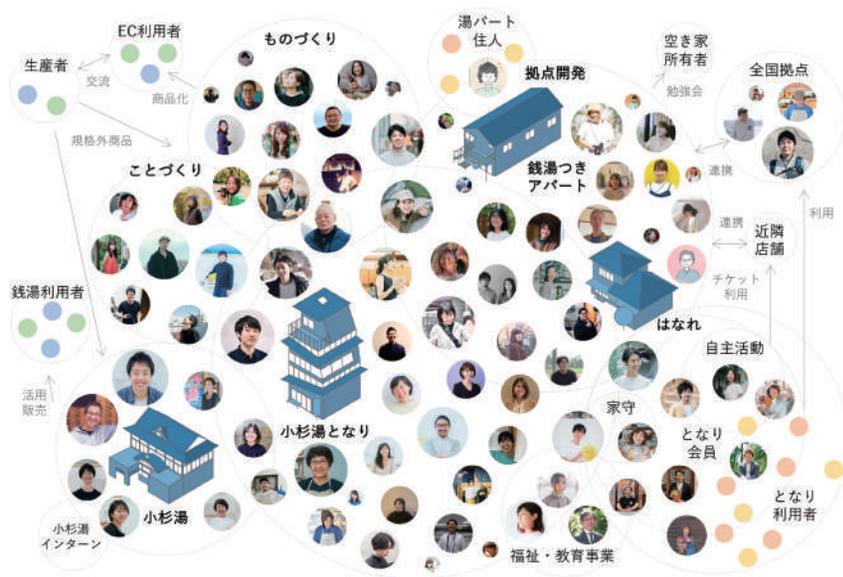
—ありがとうございます。今日は「小杉湯となり」の日常風景に飛び込んだような状態でインタビューをさせて頂いておりますが、加藤先生をはじめとする数多くの人々の生活の一部にこの場所が組み込まれている事が体感できて、「暮らしづくり」という言葉の意味も深く理解できたように思います。いま「山形」あるいは「東北」という「ローカル」からプロジェクトを仕掛ける上で、非常に大事なことを教えていただいたような気がします。

—最後になりますが、芸工大で学ぶ学生さんに向けて、加藤先生から何かアドバイスがあれば、お聞かせください。

加藤 「銭湯に通うだけでもまちづくり」だと思うんです。お店を選択して、お金を支払って、その場所を守ることに貢献する。それだけでも地域のプレイヤーとして、まちに大きな影響を与えています。まずは、山形で自分が好きなお店を見つけたり、自分の地元で好きな場所に行ってみたり、なければ自分でつくってみる。「まだ学生」などと思わないで、どんどん仕掛けてみてください。芸工大には、山形というフィールドと、教員というサポーターが用意されています。小さな実験でもいいので、「暮らしづくり」をはじめてみましょう！きっとたくさんの学びがあるはずです。

—加藤先生、本日はありがとうございました。

（聞き手：池原靖史（建築・環境デザイン学科 専任講師））



小杉湯を起点にした場と人の広がり



演習における地域でのヒアリング（上）
ゼミでのDIYプロジェクト（下）

1学年 建築・環境基礎演習

入学後、最初に取り組む演習である。建築や環境のデザインを学び始める基礎トレーニングとして、人や物や空間を丹念に観察し、これからデザインの対象とするものへのまなざしを得る。その方法は描くことから始まる。身近な道具や空間を改めて描いてみると、当然ながら人の為にできていることが理解できる。さらに寸法を測ることで数値としての理解が深まる。一方で人体スケールを超える大きな風景も描きながら観察し、大小のスケール感覚を養う。立体造形にも取り組む。初めての模型制作に取り組む、頭だけではなく手を動かしながら造形的思考を深める術を学ぶ。今年度は新たに、自身が4年間大学で利用する木製キャビネットを自作するプログラムが加えられた。ものづくりの楽しさや出来上がる達成感を味わった。共同作業も織り込まれ、これから没頭するデザインの中にある様々な感動や喜びの入口に立った。(渡部桂)



描くことで観察力を養う(上) 初めての模型づくりで意見を交わす(下)

1学年 建築・環境施工演習

本演習は、大学に隣接する県立都市公園「悠創の丘」の中にある雑木林や、公園から連続するスギの人工林を演習地としている。演習は、園地の草を刈ったり、樹木の枝打ちしながら身近に存在する里山の環境に触れ、知ることから始まる。草刈りのカマの刃を研ぐことや枝打ちするノコギリなど道具の使い方を理解することも大事な経験として行った。十分な安全管理を行いながらスギの間伐も行い、伐倒したスギは2mサイズに玉伐りした後にクサビとカケヤで割り、運搬と利用しやすいサイズに調整した。建築や環境のデザインでは、その空間を利用する目的や機能に合わせた空間整備が求められるが、その空間を実現する材料も必要であり、公園や里山での演習は、それをゼロから考えることに向いている。自ら空間を考え資材調達することで資源の存在と素材の利用を学ぶことができた。今年度は柵をつくることを共通のテーマとしたが、設置する場所の地形や立地により柵の機能、形状、大きさが変わり、その作り方も変わる。7つのグループにより7様の柵が提案された。(渡部桂)



間伐したスギをクサビとカケヤで割る(上)

間伐材や枝を用いた階段と柵(下)

1年生が最初に自ら空間を発想し、創造する設計演習である。立方体という抽象的な空間と向き合い、粘土をこねるようにさまざまな材料で模型を作り、幾何学的な操作によって内部空間を熟考し、スケール感を体得することを目的としている。最初は、スケールを把握しやすい4畳半に相当する2.7m立方の「茶室」をつくることから始め、建てる場所や見える風景、光や風をイメージしながらシンプルな操作による空間造形を行う。そして次に、空間を5.4m立方にスケールアップし、2つ以上の空間に分割し、空間に動線を作り、空間を変容させ、その形態の意味を探る。最後に、5.4m立方の空間にギャラリーという用途を加え、鑑賞する対象物のサイズと距離、シークエンスを考えることにより、スケール感と建築的な操作に慣れてゆくことを目指した。段階的に建築的創造へと発展してゆく3つの課題毎に、山形・仙台で活躍する若手建築家をゲスト講師としてお招きし、講評いただいた。講評会では、模型とプレゼンテーションシートを用いて説明し、自ら考えたデザインを他者に伝達することの難しさや、建築の評価は一樣ではなく多様であるということを感じ取れたのではないだろうか。ここに紹介される作品は、各課題の最優秀作品である。本課題で思うような成果を挙げるができなかった学生は、気落ちする必要はない。建築人生はまだ始まったばかりである。

2.7m立方の茶室 宮下輝莉

滝の側に建つ茶室である。キューブを2本の柱で傾けるという至極単純な操作によって、壁に寄り掛かりガラス天井を伝う水滴の動きを眺めるという佇み方を促す作品。少し傾けるという操作によって床と壁に作用する重力のベクトルが変化し、そこでの人と物の動きの変化に気づき、空間化した秀作である。

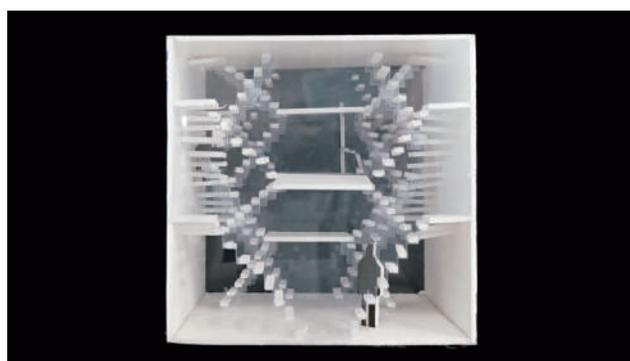
5.4m立方の空間の分節 佐々木未知花

5.4m立方を縫合するように宙に浮いた階段が上下左右に空間を満たす作品。規則正しい同一寸法の階段を隙間なく空間に挿入するというシンプルな空間操作で、空間に階段による流れと踊り場による淀みをつくりだしている。まるでSF映画のCG画像でも見ているかのような、模型表現も素晴らしく、秀逸である。

5.4m立方の空間のギャラリー 星野莉々

5.4m立方を複数の直方体の分割し、縦横に移動させるという単純な操作によって空間に流れを作り出した作品。一つ一つの直方体のプロポーションにあわせて鑑賞作品のサイズを設定し、鑑賞体験を細部までイメージされている点と、たった一つの空間操作によって多様な空間を創出した優れた作品である。

(佐藤充)



課題1 宮下輝莉 (上) 課題2 佐々木未知花 (中) 課題3 星野莉々 (下)

2学年 タイニーハウスの設計

この演習では、建築設計の基本となる木造軸組構法の力の流れを理解するために、まず標準的な軸組模型を製作する。その後、学内の平坦な敷地に建つ延べ床面積7.3m²のタイニーハウスを設計する。学生たちは学年ごとの演習室に各自のスペースが与えられ、卒業まで友人たちと互いに刺激を与えたりしながら作品を作り上げてゆく。タイニーハウスの設計は、選んだ敷地周辺の状況を読み込み、各自が考えた機能を空間に結びつけ、軸組の構造を検討してゆく。同時に1/10の軸組模型とCG画像を制作して発表する。最優秀となった齋藤花音の作品は、風が心地よく通り抜ける見晴らしの良い段々畑の上部を敷地として、室内からウッドデッキに繋がる開放的な小屋である。そこで展開される様々な場面を素直に実感できるものとなった。他にも、屋根上で寝転ぶ心地よさやそこから飛び降りる動作を床面に表した永山夏伊、食事・読書・お喋りなどの行為の展開を、隣り合う人との関係を筋交いで絶妙に区切った木村なぎ、高低差のある床を細かく配して遊具的な楽しい空間を作り出した佐々木里沙など、それぞれの思いを素直にかたちにした作品が多く見られた。(山畑信博)



最優秀賞 齋藤花音(上) 優秀賞 永山夏伊(下)

2学年 フィールドワーク入門

フィールドワークとは、調査対象になる土地を実際に訪れ、場所の観察や関係者へのヒアリングなどを行う調査技法だ。本演習では、山形市の中心市街地または大学周辺をフィールドに、学生が自ら敷地を選定して、活用案を練り上げていく。

授業の流れとしては、前半の調査フェーズで、地域の課題と可能性を探り、後半の提案フェーズで、課題を解決するためのアイデアをまとめる(一週目:行政資料の読み込み、二週目:現地調査、三週目:関係者へのヒアリング、四週目:事業モデルの検討、五週目:空間のデザイン、六週目:プレゼンテーションの作成、七週目:発表会)。このように、調査・企画・設計という一連のプロセスを体験することで、建築をつくるリアリティを意識してもらう。

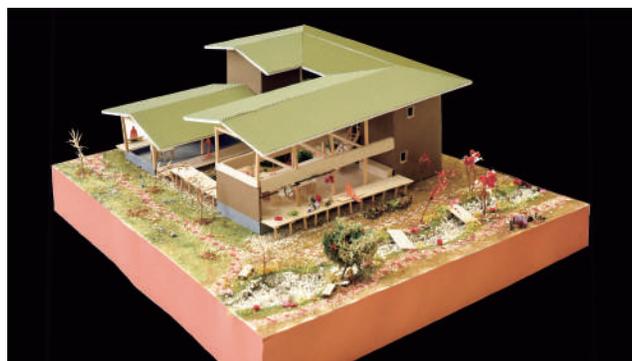
その結果、昨年度はいくつかの提案が実際に動き出している。飲食街の活性化を提案した伊藤拓駿(優秀賞)は、自分で空き店舗を借りてイベントを開催した。また、シェアハウスを提案した齋藤花音(優秀賞)、地域交流スペースを提案した佐藤りな(最優秀賞)は、p.26の「空き家活用プロジェクト」と連携して実現にむけて進んでいる。(加藤優一)



最優秀賞 佐藤りな(上) 優秀賞 齋藤花音(下)

2学年 住宅の設計

具体的な用途を持つ複数の空間で構成された最初の本格的な演習課題は、一番身近な建築といえる住宅の設計である。大学近くの3つの街区の公園の真ん中1つの街区を敷地とし、10の分譲地に見立て、それぞれの敷地の特性を読み解き、住まう家族を想定して設計する。10の敷地は、敷地形状は全て同じであるが、方位、接道条件、敷地内から見える風景などそれぞれの敷地には個性がある。それらに加え、ライフスタイルも異なるため、多様な住まいの姿が立ち現れる。最優秀の佐藤りなの作品は、設計事務所を営む家主とその家族の住まいである。住宅設計を生業とすることから、自らの生活を地域に開くことで、豊かな暮らしのイメージを外部に発信していくことを目指し、ガラスで囲われた開放的なリビングを提案しつつ、2階に家族のセカンドリビングを設けるなど住まいにおける開放と閉鎖を丁寧に解いた秀作である。佐々木禪の作品は、愛犬との暮らしを楽しむ住まいである。敷地全体を余すことなく使い、ドッグランが住まいの内部に入り込む構成は、そのまま実現することができると思えるほど完成度が高く、模型、ドローイング表現も含め総合的に高い評価を得た。(佐藤充)



最優秀賞 佐藤りな(上) 優秀賞 佐々木禪(下)

2学年 住宅のランドスケープデザイン

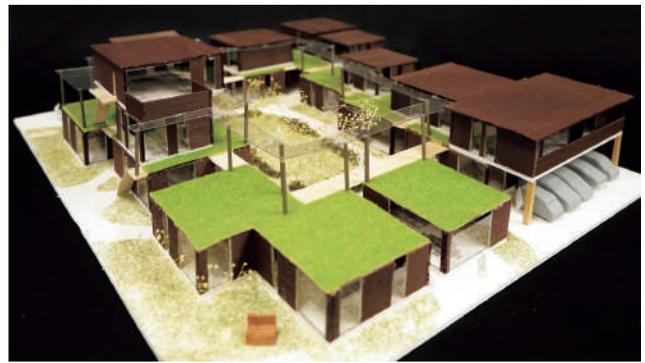
本演習は、住宅設計の演習を引き継ぎ、その敷地のデザインを行う。対象地は大学に隣接する住宅街で、区画の中央には共用の緑地を設定し、各自割り当てられた敷地と共用緑地の2つがデザインの対象となる。ゲスト講師にはランドスケープデザイナーの森山雅幸氏、工藤まい氏、佐々木愛奈氏を迎えた。最優秀の佐藤りなは、人間が持つ共通のセンス、いわゆる五感を刺激することで、確かにここに居るといふ住人の存在意識や、街区の住人が共通した感覚をもつことがここにしかないコミュニティ意識を形成させることを狙った。それを外から透けて見える住宅の中庭、大らかな共用緑地の動線、四季で変化する植栽やそこに集まる動物たちまでを見越して1つのデザインにまとめた。優秀賞の鈴木咲良はDIYをテーマとし、住宅の半屋外空間に機能性を持たせながら輪郭なく景観に溶け込む中間領域を豊かにデザインした。共用空間もDIY活動が拡張され、共同作業や展示販売に広がる計画がされ、新しい街区コミュニティの風景をデザインした。(渡部桂)



最優秀賞 佐藤りな(上) 優秀賞 鈴木咲良(下)

3学年 エコタウンの設計

3年生最初の課題である。2年生までは単体の住宅やそのランドスケープを対象としていたが、ここでは建物の要素の組み合わせ方、プラスする機能の可能性、加えてその関係性が産み出す価値をどう捉えるかという統合に対する提案が求められる。ぐっとレベルアップする課題だ。具体的には、山形の中心市街と郊外の境界的な敷地に20世帯のエコハウスからなるエコタウンを作るという課題である。日射取得が得られやすい建物にするという基本的な性能を満たすとともに、そこで暮らす人のコミュニティをどう作るかが課題となる。建築のヴォリュームコントロールと機能への理解、コミュニティを育む空間の創造する力が試される。工藤大空の作品は各住戸の独立性を保ちつつ、大きな木がある中庭とネットワーク化された屋上庭園のバランスが絶妙な集合住宅となっていた。近藤夏美の作品は建物の屋根根と上階に上がるスロープを組み合わせ、建築としての全体性を作っていた。建築的には奥まで路地を引き込んだ富井遙の案も興味深かった。(竹内昌義)

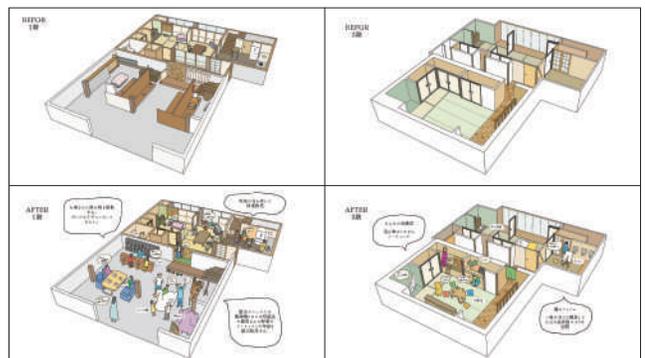


優秀賞 工藤大空(上) 優秀賞 近藤夏美(下)

3学年 実践的まちづくり演習

本演習は、2年生の演習「フィールドワーク入門」の応用編として、まちづくりにおける実践力・総合力を養うことを目指している。実際の空き物件を対象に活用アイデアを検討し、最後は物件の所有者にプレゼンテーションを行う。昨年度の対象地は山形県新庄市にある万場町商店街。定住人口だけでなく交流人口の拡大が求められているため、テーマは「宿泊施設+α」に設定した。

現地調査では、物件の実測や商店街の店主へのヒアリングを実施。人との関係性やお金のことまで視野に入れながら提案を考えていった。発表会には、さまざまな参加者(地域住民・行政職員・民間事業者)に来て頂いた。渡邊咲来(最優秀賞)は、複数の空き物件を活用して、地域の暮らしを追体験できる拠点をつくる提案。川田智史(優秀賞)は、宿泊者向けの宿と短期移住者の住宅を掛け合わせる提案であった。前者は空間、後者は時間の広がりを感じる提案であるが、どちらも事業を伴う小さな場づくりをまちに広げていく提案で、参加者からも活発な意見が寄せられた。(加藤優一)



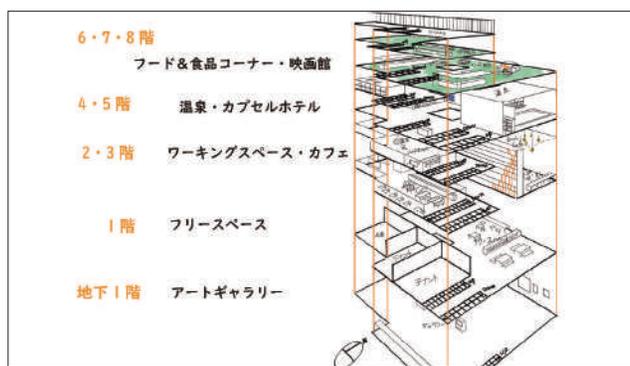
最優秀賞 渡邊咲来(上) 優秀賞 川田智史(下)

山形市の中心市街地に空き家そのまま存在している旧大沼デパートのリノベーションを求めた。将来、解体が予定されるが、それまでの期間、ポジティブに、実験的にこのビルを活用する方法はあるか。今の20代が、山形の街なかをどう捉え、どのようなコンテンツやデザインにより再生しようとするか、自由な発想と構想力を期待して課題設定を行った。

With dogというタイトルで描かれた鈴木里奈の企画書は、そのまま実現させたいようなリアリティーと説得力、そしてチャームな魅力があった。犬と人とのコミュニケーションに中心軸を置いて組み立てられたプログラムは、一見、ターゲットを絞っているように見えて、実は多くの人を当事者として巻き込む、マーケティングのお手本のような回答だった。

学生たちは、身近で素朴な視点で都市を見ている。それは時に、プロが考えることよりも本質を突き、心に訴えかけるストーリーを生み出す。

現在進行中の大規模な再開発においても、ここで示されたような、未来のリアルなエンジョイに直結するプログラムとデザインが織り混ぜられていることを願いたい。(馬場正尊)



最優秀賞 鈴木里奈(上) 優秀賞 太田碧(下)

この演習は農村の環境と暮らしを読み解きながらその魅力を発信し、都市住民との結びつきも含めた新しい農村の暮らしを提案していくことで、移住定住にもつなげることを目標としている。対象は白鷹町の東部に位置する山間の地区、人口約千人の鷹山地区である。現地ではちょうどホップの花が咲き、紅花も見れる時期で、美しい風景を楽しむことのできる演習でもあった。また、移住者が古民家を改修して営むカフェでの昼食も、食を楽しみながら、移住者と直接触れる貴重な体験となった。そして、移住してトマトを栽培する農家からは、この風景に魅せられて移住したことや農業の課題などを直接聞く貴重な機会となった。清正碧は、こうした地域の魅力や課題をビジュアルに分かりやすく地図や写真、イラストでまとめ、改善提案までも行った。この地域のブドウを原料として使う大手飲料メーカーとも協働しながら地域活性化に取り組むという提案であり、企業の持続的な発展と、地域の持続的な発展は一体のものであることを指している。丘の上の美しいブドウ畑でワインを楽しみながら取り組むという提案はぜひ実現したいものである。(三浦秀一)



最優秀賞 清正碧(上) 優秀賞 村上優衣(下)

この演習は、架構の構想・具体化のプロセスを把握して力の流れを実感して設計することを目的とし、構造設計家の木下洋介氏を招いて行われた。課題は屋内型児童遊戯施設の設計で、延べ床面積は2,000m²程度、メインホールは1,000m²以上の大空間という条件が付されている。敷地は市街地または郊外のいずれかを選択する。大空間と遊戯機能との関係や屋内外のつながりをどうするかなど、様々な課題解決能力が問われる。毎回のエスキスは思考のプロセスを辿れるように、オンラインボードを活用した。最優秀案となった山田晏璃の作品は、子どもたちを包み込む手をイメージした2つのRCシェルを重ねて空間を造り出している。シェル上部の空間やなだらかな起伏を利用した遊び場が子どもたちの生き活きとした行動を誘発し、切り立ったガラスの大開口部が屋内外を視覚的につなげている秀作である。太田碧の作品は、トラスによる帯状の屋根を複数隣接させることにより、敷地から望む山々イメージさせ、屋上利用も含めて豊かな自然と一体となった遊戯施設となっている。他にも木造トラスによるドーム型、ユニークな卵形シェルなど、多彩な作品が多く見られた。(山畑信博)



最優秀賞 山田晏璃(上) 優秀賞 太田碧(下)

3学年 ドイツ・山形の都市分析とサステイナブルプランニング

ドイツ在住の学科OB永井宏治氏を講師に迎えてリモートでの指導を受けながら、ドイツの都市計画を学びながら山形市中心市街地の分析と2040年を目指した提案を行った。演習の流れとしては、持続可能な都市の構成要素を考え、山形市中心市街地のSWOT分析、土地利用分析、そして都市計画を提案するという手順が進められた。ドイツでもコロナやデジタル化による影響が都市の在り方まで変えるようなインパクトを与え、商業地で商業が成り立たなくなりつつある様子が伝えられ、生活機能と生活空間をミクスドユース構造に転換していこうとする流れが起きていることを学ぶ。持続可能な都市計画においては脱自動車への転換も図られようとしている。日本においてはドイツのように都市計画の権限が強くないものの、山形市中心部においても近年高層マンションがいくつも完成し、結果として人口が増加するという現象を学生も確認する。こうした硬いデータ分析を鈴木里奈は柔らかいイラストで分かりやすく伝え、提案も13の具体的な提案としてまとめているところは非常に洗練されている。山形市中心部で動き始めている大きな再開発の在り方を考えていく有用な成果だと言える。(三浦秀一)



最優秀賞 鈴木里奈(上) 優秀賞 川野辺俊輔(下)

3学年 天童市図書館の設計

将棋の駒や木工、温泉などで有名な天童市の図書館を設計する。敷地は市役所、市民ホール、美術館、公園など公共施設がまとまったエリア。これらの施設ともつながりながら、新たな街の交流拠点となる図書館を構想することを求めた。同時に、デジタルが進む時代、本という物質の存在のアイデンティティについての、今を生きる学生ならではの回答も見てみたかった。

渡邊咲来の作品は、ビオトープライブラリーと名付けられ、生態系と図書館が溶け合うような、見たこともない風景が表現されていた。周辺の施設にまで自然が侵食し、同時に本棚や読書空間も散らばっている。緑や水を感じながら本を読む風景は、とても気持ちが良さそうで、知的行為であると思っていた読書が、人間の本能にも作用するような行為であることを気づかせてくれる。本も自然も、リアルであるからこそ、人に響き続ける普遍的な価値なのかもしれない。地域社会と図書館との関係性を問うた課題であったが、学生たちの発想はそれを超え、人間と本、自然と本の付き合い方にまで言及した作品もあった。そのみずみずしい感性に改めて驚かされる。(馬場正尊)



最優秀賞 渡邊咲来 (上) 優秀賞 富井遙 (下)

3学年 ランドスケープ総合デザイン

風景を美しく健全にすることや、地域特性を活かしながらその場の価値を高めることがランドスケープデザインの1つの方向である。対象地は集落の風情が色濃く残る山形市郊外の岩波地区とした。土地の文脈を理解した上で課題やテーマを導き、将来像を提案する。ゲスト講師には環境デザイナーの廣瀬俊介氏を迎えた。

最優秀賞の葛西大悟は、現地踏査から対象エリアに流れる龍山川に注目した。もとは地域住民に多様な河川との関わりや物理的に川へアクセスする空間があったが、それが無くなったことに当地の価値の損失があるとし、人もその他の生物も多彩な方法で河川に近づくことや意識することができる空間を提案した。懐古ではなく、現代の土木施設をも飲み込みながら果敢にデザインしたことが評価された。奨励賞の村上優衣も同じく龍山川を対象とした。丁寧に土地の成り立ちを調査分析し、河川の自然度を回復する提案を行った。このデザインを山際から河川を通じて市街地に引き下ろすことで都市の環境改善までを構想した視点が評価された。(渡部桂)



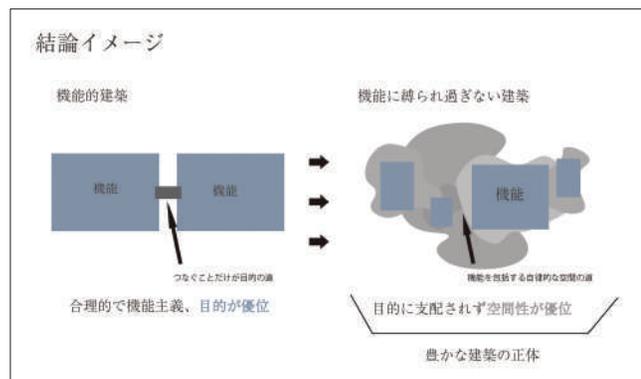
最優秀賞 葛西大悟 (上) 奨励賞 村上優衣 (下)



建築の豊かさの正体を探るため約100個の様々なタイプの模型を制作し、そこから豊かな建築の条件を見つけ出し定義した。

結果、建築における豊かさとは「機能」と「機能を許容できる空間」を攪拌することで生まれるという結論に至った。言い換えると、合理性や機能性にとらわれすぎない建築である。具体的には、機能を限定しない、自律的な空間を丁寧に設計するという事である。その結果、ユーザーに対して多く空間的選択肢を与えることに繋がり、ユーザー自身が必要なものを取捨選択できる建築となる。私は、上記で述べた、ユーザー自身が取捨選択できることこそが、豊かさに繋がると考える。設計者が一方的に人を機能に縛り付けないことは、人がもっと自由に動物的に生きていくためにとても大切な事なのではないのだろうか。しかし、機能性を蔑ろにしているわけではない。機能性に加え、様々な行為を許容できる空間を設計という事である。

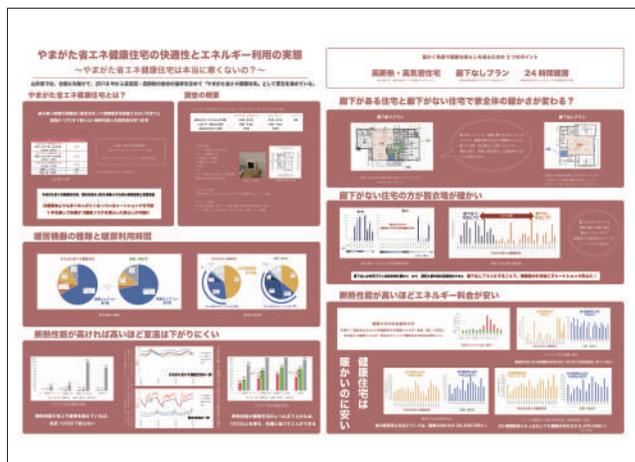
この考えをもとに建築を設計する。しかし、建築を考える上で、都市と地方ではお互いに得られる豊かさに違いが生じると感じた。そのことから都市と地方の2か所で設計を行う。地方においては住宅地を、都市においては都営住宅を対象とした。地方においては空間的な多様性と共に、そこに住む住民の個性が街に滲みやすい空間を意識し、道を中心とした住宅地の設計を行なった。都市においても空間的な多様性に加え、人が大昔、洞窟や樹木に寄り添って生きていた頃のように自然とそこに住みついていくということを強く意識し設計した。(大槻凜花)



作品模型(上) 作品ダイアグラム(下)

講評

最優秀の大槻凜花は建築の豊かさを機能的な空間ではなく、機能どうしをつなぐ接続の部分にあると考え、都市と田舎(郊外)の二つの空間で実践した。豊かな空間をつくりだす様々な状態を模型で作り続け、比較し、分析し、独自のロジックで新しい空間の設計を定義した。その方法論に従って建築を組み上げた。建築は論理的に作られるべきだが、その原初にはその建築家の属人的な直感が宿っている。それを社会的な状況や様々な条件とともに、形を与える行為であると言える。試行錯誤しながら、より高いレベルに到達できたことが価値があると評価した。(竹内昌義)



やまがた省エネ健康住宅の快適性とエネルギー利用の実態
—やまがた省エネ健康住宅は本当に寒くないの?— 高橋日菜

山形県では、全国に先駆けて高気密・高断熱の独自の基準を定め、2018年から「やまがた省エネ健康住宅」として普及を進めてきた。やまがた省エネ健康住宅の定義の一つに「最も寒い時期の就寝前に、暖房を切って翌朝暖房を稼働させない状態でも、室温が10℃を下回らない断熱性能と気密性能を持つ住宅」というものがある。しかし、10℃を下回らないというのは、このくらいのUA値で、このくらい断熱して、このくらいの気密で隙間がなければ、10℃は下回らないだろうと推定されているだけで、あくまでも曖昧なイメージの話である。

そこで本研究では、やまがた省エネ健康住宅に認証されている住宅の実際の室温を調査することで、本当に10℃を下回らない住宅になっているのかを検証した。(高橋日菜)

講評

山形県は都道府県として始めて国の省エネ基準を超える断熱性能となる「やまがた省エネ健康住宅」基準を策定した。高橋日菜の研究は、このやまがた省エネ健康住宅の実際を温度データとエネルギー消費データから調査し、検証することであった。建築や住宅の省エネ性能を計算で出すことは設計段階において重要であるが、実際に人が住み始めてどうかを確認することもまた重要である。なぜならば、建築というのは人の使い方によって変わるからである。データが得られたのは31棟の住宅であったが、こうしたデータを分析するのは一般に想像されるほど単純ではなく、一筋縄でいくものではない。地道な分析を繰り返した結果、開放的な住宅のプランが快適性にも寄与するという結果が示された。単純な結果のようで、こうしたことがデータとして示されたことはなく、貴重な成果だと言える。(三浦秀一)



家具以上建築未満による、住み手が更新していくプロセスの提案
清野駿之介

かつての通りはさまざまなアクティビティが滲み出た「人中心」の場所だった。しかし大型複合施設の登場による都市の空洞化、自動車の増加によって、通りにあった店舗は空き店舗化が進み、「街路」で行われてきた活動やコミュニティは喪失しつつある。衰退した通りに住む住人は、高齢化が進み、過去の営みを知る住民は、空き家、空き店舗に新しいものが入った時の想像ができず、受け入れに不安を感じている。そこで、新築やリノベーションのように大きな更新ではなく、その段階に入る前のきっかけを、戦略的かつ短期間で効果を明確にするタクティカルアーバニズムの考えの下、家具と建築の中間的な装置、「家具以上建築未満」と定義し、使い手が容易にかつ自由に空間を操作することができるプロセスを提案していく。(清野駿之介)

講評

この作品は、一般に流通している資材と、誰でも組立可能な方法により、安く自在に機能や空間を生み出す仕組みの提案である。家具機能から空間の構成や演出までを範疇とし、かつ建物のエクステリアとインテリアを融合させるまち並みのデザインにまで喰い込んだ力作である。何より、まちの現状を変えたいと思う主体が、その実験として始められる手掛かりを提供しようとしている。その眼差しがよかった。また粘り強くフィールドワークを重ね、商店街の方々に耳を傾けてデザインを練っていった過程も評価したい。(渡部桂)



形ないものを形作る 覚張日梨

人類は形のないものを形作ることをしてきた。それは信仰心である。その形は人々の思いが実体になったもので、形のないものをそのまま形にしているのではなく、形のないものを想像させるものを作っている。私はそんな目に見えないものを信じてしまう人間の信仰心に触れる設計はできないか考え、神社の持つ結界性を利用し、歴史を守ることができるのではないかと思います。私が設計した建築物は人々の手入れが必ず必要なものである。

そして、それは人々の興味や意識がこの鉱山の歴史から離れたら崩れ落ちてゆくようにとても素直に構造物に現れる。これらの形がなくなってゆく時、朽ちて苔が生えた木々の間に人工物があるような、不気味な空間になるのではないだろうか。その時間の中で私がこの鉱山跡を見つけたように私が設計したものが見つけられ、この鉱山の歴史がまた誰かによって残される葉のような役割をこの設計で担いたい。(覚張日梨)

講評

墓標、神社、記念碑など人類は、悠久の昔から形のないものを形作ってきた。この人類の精神性から生まれる建造物について探究してゆくなかで、覚張日梨は、「時の葉」という概念に辿り着く。本作品は、鉱山の麓から硫黄の貯蔵遺構を結ぶ約3.5kmの参道によって構成された、この地の歴史を祀る神社である。蔵王石が敷設された参道に鳥居と坑道内の支柱を模した木製の道標を設け、建物の基礎や索道のワイヤーなど、今も尚、鉱山跡地に点在する当時の営みの断片をモニュメント化した休憩所、視点場にて埋没した歴史を顕在化させる。道標やモニュメントは、時と共に朽ちてゆく。しかし、その片鱗は、「時の葉」として我々に静かに語りかけ、記憶のリレーは続く。歴史が息づく建築である。(佐藤充)



本学、建築・環境デザイン学科の卒業研究・制作は極めて多様なものが入り混じる。一般的な建築学科であれば構造、意匠、設備等々、分野は分かれて評価もされることが多いが、建築は本来、アートとデザインの融合の産物であり、本学科はさらに環境という大きな社会課題をも対象としており、芸術工科大学という本学の名称にもある理念を具現化する象徴的な学科でもあるといえる。特に東北出身の学生が多い中、地域課題への働きかけを考えるものが多く、1年間をかけたリサーチ量と課題解決への熱量、そして学生個人としての思いが教員にも伝わってくる。本学科は8研究室のうち3研究室が意匠系という構成の中で、設計と論文を全教員で評価しているが、論文と設計を同時に審査しているところを聞いたことはない。毎年、この審査は教員の頭を悩ますが、本来、建築や環境の中にある多様な要素は独立して存在するわけではなく、相互に絡み合いながら存在する複雑なものであり、そこを踏まえた評価を行おうとするのも本学科の特徴である。

卒業研究・制作展は、学生らが「Re:2020」とのタイトルをつけ、新型コロナウイルス感染拡大した年に入学し、リモート授業から大学生活が始まった4年間であったことをテーマとして掲げた。彼らは展示方法や展示デザインにもこれまでにない工夫を凝らし、意欲的なものとなった。展示期間中のトークイベントでは、ゲストにアーキペラゴアーキテックススタジオの畠山鉄生、吉野太基の両氏を招いて、学生との白熱したディスカッションも行われた。また、まちなかの未来展トークセッションでは、山形市の都市計画に係る行政マンを招き、中心市街地都市計画の現在を紹介してもらうとともに、学生からは同エリアに関わる演習のプレゼンテーションを行ってもらった。こうした学生の学習成果を発表し、社会や地域との交流も図る場としても大きな役割を果たしたのではないだろうか。(三浦秀一)



卒業制作展のコンセプトを表現したサイン（上左） 展示風景（上右）
トークイベントの様子（下）



日英の住宅における庭の使われ方に関する研究

—庭に面した室内の機能と庭の関係— 藤田純平

この研究は、幼少期をイギリスで過ごした藤田純平が、日英の戸建て住宅の庭の使われ方の違いに興味を持って、その理由を明らかにするために調査を行った基礎的な研究である。これにより両国の庭の使われ方の一般論を語ることはできないが、都市郊外の住宅を対象に、気候、敷地図（配置、建ぺい率）、平面図、庭の状態、植物・生物の状況などをヒアリング・実測調査から得たデータの分析結果は興味をそそられる。イギリスではノーフォーク州のディス（ロンドン北東120km）、日本では山形県朝日町、宮城県仙台市錦ヶ丘を対象とした。一般には、気候や蚊などの害虫の有無、靴の脱ぎ履きが庭の使われ方の違いに現れていると考えられるが、ここでは庭に面した住居内の機能や庭の維持費用にも着目した。ディスでは1階の寝室やキッチンが庭に面している住宅が多く、また北側にも庭が配置されていて、逆光となることなく庭の花々を楽しめる様子や、日本の10倍近い維持費（20万円以上）をかけて手入れをしている様子など、興味深い庭の使われ方の実情を垣間見ることができる。コロナ禍ではあったが、直接現地に出向いてデータを得た成果と言えよう。（山畑信博）

賞	氏名	作品名	分野
最優秀賞 学生賞	大槻凜花	建築物における豊かさの正体	設計
優秀賞 学生賞	高橋日菜	やまがた省エネ健康住宅の快適性とエネルギー利用の実態 —やまがた省エネ健康住宅は本当に寒くないの?—	論文
優秀賞	清野駿之介	家具以上建築未満による、住み手が更新していくプロセスの提案	設計
優秀賞	覚張日梨	形ないものを形作る	設計
奨励賞	岩崎美空	つづく、共に生き育まれる風景 —過去・現在・未来を繋げて、土地と人々の生活を彩る—	設計
奨励賞	浅野百花	多角的なまちづくりを実現させる分析ツールの研究 —日常生活で取り戻せ、ソーシャルメディアとしての商店街—	論文
奨励賞	木村友音	テキスタイルでつくる空間	設計
奨励賞	真壁洋志	みちのく村田町、小京都再編記録	設計
奨励賞	坂上由衣	記憶の根源と受け継ぎ方の研究 —想統 記憶と思い出の継承方法—	論文
奨励賞	櫻井颯人	つながりを生み出す新たな歴史と街並みの継承 —秋田県秋田市新屋地区における魅力の認知とそれを活かした街づくり計画—	論文
奨励賞	吉田葵葉	What is 'Love'?	設計

ID	住宅から見た庭の方位					庭に面した空間	利用頻度	維持費 (1ポンド=167円とする)
	北	南	西	東	その他			
D-1	●	●	●	●	●	●	水やり、芝刈り、除草取り週3~5時間	約1200ポンド (約20万円) /年
D-2	●	●	●	●	●	●	毎日3時間	約180ポンド (約3万円) /年
D-3	●	●	●	●	●	●	夏2時間/日、基本1回/週	約1440ポンド (約24万円) /年
D-4	●	●	●	●	●	●	6時間/週、基本的に使わない	0ポンド

場所	部屋	開口部	開口部の種類					
			引き違い窓	掃き出し窓	掃り出し窓	換気錠し窓	片開き戸	両開き戸
			→	→	→	→	→	→

敷地と1階平面の関係/ディス（上左） 敷地と1階平面の関係2/ディス（上右左） 敷地と1階平面の関係/朝日町（上右下）
住空間と庭の関係（ディス）（中） 庭に面した開口部の種類（ディス）（下）



「未来に続く古民家」

一旧山辺街道沿いにおける古民家の価値評価と継承方法の考察— 芹澤菜月
講評

県内山形市から山辺町へ続く旧山辺街道は、近世から続く古い道で、沿道には商家や農家、蔵など歴史的建造物が数多く残されている。その分布状況の把握、特徴分析から所有者とその次世代家族へのヒアリングやアンケート調査を通じて、こうした古民家が未来へ引き継がれにくい原因の究明と、その継承に必要な条件を究明した意欲的な研究である。わが国では高度経済成長期以来、経済効率優先の発想からこうした歴史的建造物が簡単に取り壊される状況が顕著であるが、本学周辺域でも特に残存率の高い対象地をフィールドとして取り組んだ卒業研究の延長線として、現状に警鐘を与え、所有者とその家族への丹念な聞き取りから深くその実態を掘り下げた成果は意義深いものといえよう。今一步、若い世代の住要求を満たす具体的な再生、活用提案に持ち込むことには至らなかったが、本人は古民家を活用した設計の担い手を目指しているため、研究を通じて構築された住民や次世代とのパイプを無駄にせず、今後の社会経験を活かしながら本テーマを生涯のライフワークとして引き継ぎ、実現を目指していくことに期待したい。(志村直愛)



修了制作展 芹澤作品プレゼンボード(上)
研究対象地「山辺街道」陣場地区の風景(下)

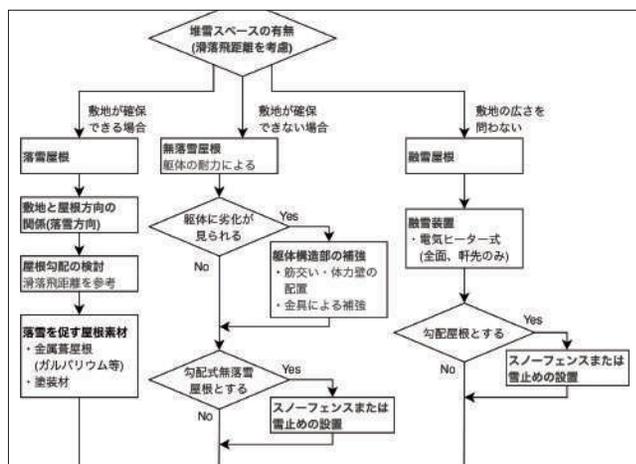


住宅の部分断熱改修における改修効果と改修プラン考案に関する研究 加藤裕也

講評

膨大な既存住宅のストックをいかに良質なものにしていくかがこれからの建築にとって重要になっているが、加藤裕也は住宅の断熱改修の研究に取り組んだ。断熱改修の必要性については、多様な住宅、多様な施主、多様な地域性の中で、一般的な手法を確立するに至っていない分野だと言える。特にコスト面で新築工事に対して割高感を拭うのが難しい場合が多い。東北地方では寒さ対策、省エネ対策として断熱改修は効果も大きい一方、面積規模が大きい住宅が多く、そこに子育て終了後の高齢者夫婦だけが住んでいるというような例も多い。このような住宅に対して、住宅全体を断熱改修するのは費用負担が大きくなり過ぎるため、必要な部分に絞った断熱改修を行う部分断熱改修が加藤裕也の取り組んだテーマであり、東北地方にとって求められる研究である。

住宅の調査では、仙台の自宅を調査しながら仙台や山形の住宅の温度実測調査を数多く行った。また、実際の断熱改修の工事現場にも入り、作業を手伝いながら工程を調査した。さらに省エネルギー計算プログラムも駆使して断熱改修の効果をシミュレーションした。こうした調査の結果、部分断熱改修では、ほぼ外のように寒い廊下と暖房居室との間仕切り壁に断熱材が入ることがなく、結果として改修しようとする居室の断熱性能は従来の住宅全体を対象とした断熱性能よりも悪い性能になるということを明らかにした。当たり前のような話ではあるが、こうした間仕切り壁の断熱強化を指摘するものはこれまでいなく、大きな発見であると言える。山形県は都道府県として始めて国の基準を超える健康省エネルギー住宅の基準を策定しているが、加藤裕也の研究はこうした部分断熱の性能評価についても優れた知見を提供するものである。(三浦秀一)



豪雪地帯における持続可能な木造耐雪住宅の研究

—弘前市の中古住宅の活用に資する住宅改修モデルの提案— 小野葉月

講評

この研究は、豪雪に見舞われ、空き家も増えつつある弘前市において、雪害対策や住宅性能向上を目的とする改修促進をすることにより、ストックされている中古住宅の有効利用を目論んだものである。対象としたのは新耐震基準以降の住宅であり、この時期に建設された住宅であれば、改修により付加価値を得て、十分に中古住宅市場で流通するであろうとの仮説に基づくものである。調査は、積雪・雪害・雪処理の現状、住宅購入の動向、施工費・ランニングコストの試算、ヒアリング調査に及び、勾配屋根を基本とする屋根形状を前提とするなど、弘前市の景観計画への配慮も行っている。この地区の中古住宅の実情から、耐震性を得た上での克雪方法や断熱性能レベルと施工法などの改修の流れを住宅改修フローとして明示し、さらに費用を比較できるモデルを提案した。中古住宅を購入する際に生じる「耐久性や快適性が新築に劣るのではないか」という不安は、これらの成果により可視化され、持続可能な社会への貢献も期待できる労作である。なおこの研究は、本学の卒業・修了研究・制作展において、優秀賞として顕彰された。(山畑信博)

山形R不動産

山形R不動産とは、街なかに眠る空き物件を発見し、そのリノベーションデザインや、新たな活用方法を考え、時に実行に移す試みである。

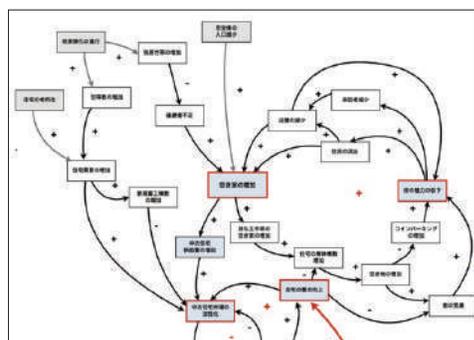
活動の基本は、「山形R不動産」というウェブサイトを制作・運営し、そこに学生たちが発見したユニークな物件を掲載することから始まる。実際にそれを見た客が、その物件を借りたり、リノベーションすることに繋がることもある。過去には、使われなくなった旅館を学生たちがつくりながら暮らすシェアハウスにしたり、閉じていた本屋をオーナーさんと一緒に、新たなギャラリー付きのブックストアとして再生したり、空き物件を数日間だけのカフェやクラブにしたり、世代によって様々な実例が存在する。

街なかの空き物件を探すこと自体が、都市の観察であり、同時にデザインやアイデアによって価値を変換できる空間を探す訓練にもなっている。この活動を経験した学生たちは、多数、リノベーションに関わる設計事務所、ディベロッパー、不動産会社等に就職している。そのような意味で、社会や未来の仕事に触れる機会にもなっている。

最近では、物件だけに留まらず、街なかのポテンシャルのあるショップやパブリックスペースを発見、紹介したマップの制作など、活動領域を少しずつ拡張しつつある。

学生たちは、考現学的な視点を持って都市空間を観察し、小さな工夫で変化を誘発し、その集積で街の風景を変えていくことの可能性を感じているだろう。

建築、メディア、不動産、今までバラバラだった領域を横断することで、自分たちの学びをどのように社会に対し役立てていけるかを体感することができるのが、この活動の大きな特徴である。(馬場正尊)



改修検討におけるフローチャート(上)

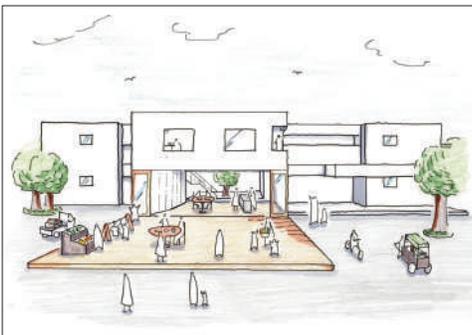
中古住宅市場の活性化におけるループ図(下)



JA山形市エコリノベーションプロジェクト

今年から始まったJA山形市の子会社ジャオが所有する築30年の集合住宅のリノベーションプロジェクト。JA山形市組合員所有賃貸物件の多くが築30年を迎え、設備の老朽化や間取りの時代錯誤による入居率の低下から「建て替え」か「リノベーション」か、判断を迫られる機会が増えている状況において、建物の長寿命化による物件所有者の経済的負担の軽減および環境負荷低減を踏まえ、リノベーションによる物件維持管理の可能性を検証し、JA山形市管理物件のこれからの賃貸事業モデルの構築を目指す。

「断熱性能の向上」をはじめ、「暮らしの選択（カスタマイズ）」「商品にならない野菜の供給などJA山形市ならではのエコ」の3つの視点によるエコを軸に、JA山形市の若手職員と学生が議論を重ね、コンセプト、間取りや賃料設定まで総合的にデザインを検討した。学生が提案した、暮らしを豊かにするアトリエをイメージしたシェアスペースを基点に入居者の適度なコミュニケーションを育み、建具やカーテン、ボックス家具によって間取りをカスタマイズできる、山形市中心部の新たなライフスタイルの実現に向け、設計中。2024年12月竣工予定。（佐藤充）



全体での集合写真（上）
イメージスケッチ（下）



ストリートリノベーションプロジェクト

ストリートリノベーションプロジェクトは、2021年に学生たちによって立ち上げられた。山形の街なかの歩道やパブリックスペースに、学生たちが設計・制作したストリートファニチャーや屋台、遊具等を設置し、市民の新しい居場所を作るための試みである。

すずらん通りや七日町大通りのマルシェなどに参画したことをきっかけに、他の街の社会実験に呼ばれたり、一部は常設されたりしている。

制作のプロセスも実験的で、ショップボットと呼ばれるCADで描いた図面をそのまま切り出すことができる新たな木工加工機械を活用し、今までなかったような自由な造形の家具を実現している。学生たちの生き生きとした発想や造形力が十分に発揮された、ポップな作品が多数生まれ、街に展開されることになった。

現在、国土交通省によりウォークアブル政策が推進されている。これは、歩道をただの通過導線ではなく、ベンチや木陰を整備することにより、歩いて楽しい都市環境を整備していこうと言うものだ。生産性の高い都市は、機能性ばかりではなく居心地が重視され、そこにクリエイティブクラスが集まることがデータで明らかになっている。日本においてもクルマから歩行者を中心にしたストリートへ、価値観の変換が進んでいる。

ストリートリノベーションプロジェクトは、これらの動きと呼応している。

今後は、ファニチャーのバリエーションを増やしたり、実験を行うフィールドをさらに拡張することが企てられている。さらに企業や行政等との連携も深め、都市空間を小さな工夫やアイデアで豊かにする実験的なプロジェクトに発展していくことが期待されている。（馬場正尊）



ツリーハウス

今年度は、尾花沢市にある徳良湖畔のオートキャンプ場の遊歩道に面する木立の中で製作を行った。尾花沢市ふるさと振興公社代表の石山健一氏から、「森のようちえん」の活動の場としてツリーハウス製作の話をいただいて、学生たちは新緑の頃に現地を視察し、木々を実測し、製作への想いを強めていった。徳良湖は花笠音頭発祥の地であり、ヨットもできる風光明媚なところである。メンバーは5グループに分かれてそれぞれ案を作成し、その後コンペを行った。最終デザインは各案の良いところをまとめてブラッシュアップして決められた。デッキを三層にして、最上部には隠れ家的な小屋が載り、下段のデッキにはボルダリングが取り付けられ、小さな子どもたちにも楽しんでもらえるように配慮した。傍らにはブランコも製作された。製作に当たっては、ツリーハウス設計班、遊具班、企画班に分かれて作業を行った。この地は冬季の積雪が2m以上となり、今回製作対象となる樹木は落葉樹であるため、落雪が直接ツリーハウスを直撃するので、雪囲いを設置する一方で、従来以上に積雪荷重を見込んで部材断面を大きくして設計を行った。合宿の場となった徳良湖自然研修センターでは、現地の方々のサポートを受けつつ、22名の学生たちが完成に向けて9日間寝食を共にした。苦労も多かったと思うが、学生時代の良き思い出となるであろう。代表の上田健斗、副代表の富井遥はじめ3年生たちは、多くの下級生たちをまとめながら、それぞれの担当をこなしていた。製作に先立って、木片に絵を描いてもらったり、ノコギリで木を切ったりする体験イベントが行われ、子どもたちが思い思いに描いた絵は、完成したツリーハウスの内壁面に、宝物のように飾られた。この拾六号樹は「めぐみ」と名付けられた。お披露目会では、子どもたちが思い思いに登って楽しんでくれたり、お礼の言葉を述べられたり、学生たちは疲れを忘れて癒やされていた。(山畑信博)



早戸温泉環境整備実習

只見川を望む福島県三島町早戸温泉の遊歩道整備は、今年度で14年目を迎える。ようやく新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきたため、十分な感染対策を行いながら、昨年よりも1日滞在日数を増やし3泊4日(9月7～10日)で実施した。例年よりは滞在期間が短い、コロナ禍以前のような本格的な合宿形式での実習は久々となり、これまで構築され学生間で継承されてきた様々な合宿システムが途切れていることを再認識することにもなった(去年は2泊で旅館滞在であった)。

前年度、遊歩道にサインを設置したこと、遊歩道の利用環境が向上した。今年度はさらに遊歩道の魅力を引き出すために、遊歩道での滞留を促すウッドデッキの設置を行った。これまでの整備と同様、当地の自然環境に最大限配慮することを念頭に、丸太と角材を資材とし、現地の地形に沿わせる工法とし、施工もできるだけ人力で行った。現場への資材搬入も人力で行ったが、落差の大きい作業道を運搬する必要があることから大変苦勞し、機械やエネルギー使用を体で感じ考える良い機会となった。

遊歩道へのデッキの設置は3基を計画し、今回は実習の時間とコストの制約から2基の施工を完了した。また過去に整備した箇所も行った。完成したデッキは、もとの遊歩道では感じる事ができなかった新たな只見川の景観をもたらす視点場となった。

実習では、早戸地区から現地滞在の調整をいただいた。資材調達は佐久間建設工業(株)に協力いただいた。滞在や資材の費用の一部は三島町から補助いただいた。また実習の指導役として非常勤講師の田賀陽介氏、卒業生の阿部聡史氏、菅拓哉氏、庄司はるか氏、笠原隼也氏に協力いただいた。感謝申し上げたい。(渡部桂)



只見町周辺環境整備実習

2011年7月の新潟・福島豪雨でJR只見線が被災し27kmの区間が不通となった。2022年10月に全面復旧となった。只見町では開通に合わせ沿線や町の振興を図ることをねらい、只見駅からほど近い三石神社の参道整備ほか魅力向上を計画・実施してきた。渡部研究室では2020年から参道の調査・設計・整備を地元只見区の住民と共に行ってきた。三石神社は「只見ユネスコエコパーク」や「越後三山只見国定公園」の中にも含まれており、自然環境への配慮と整備後の維持管理から自然素材を用いた。

この流れから、昨年度より只見線津川橋梁の脇に、鉄道ファンが写真撮影を行うビューポイントの整備を開始した。昨年はそこに向かう小径の整備を行い、今年度は急斜面に雛壇状の足場を整備し、カメラマンのための安定した足場を用意した。今後も同町内のビューポイントを整備し、新しいランドスケープ（風景）の魅力を開拓してゆく予定である。今後の只見町の観光振興に寄与することを期待している。（渡部桂）



斜面にカメラマン用の足場を整備（上）
鉄道ファンに人気の只見線津川橋梁（下）



鮭川村空き家等活用プロジェクト

本プロジェクトは、活動5年目を迎えた。「トトロの木」として親しまれ、村の観光名所として多くの観光者が来訪する「小杉の大杉」から村全体の観光資源の好循環を構築するための拠点となる「寄り道の駅」の構想は、村の合意形成に至らず、先行して特定空家解体跡地の駐車場整備を実施することとなった。そこで、駐車場の配置計画の検討と、来年度以降の「寄り道の駅」整備に向けて地区住民が自主的に実施した仮説カフェの運営サポートを実施した。旧牛潜小学校から仮説カフェで使えるような什器を運び出し、誰もが親をもって滞在することができる小学校を想起させる空間にデザインした。これまで感覚的に来訪者が一定数いると捉えていた行政に対し、仮説カフェ運営時の来訪者数の調査結果をまとめることで、「寄り道の駅」の必要性を示した。地域住民との小さな活動は、着実に実を結びつつある。一方で、地域住民の高齢化が進んでいることも考慮すべきである。地域住民の熱意があるうちに、全国的に知名度の高い「小杉の大杉」を活用した村内の好循環を創生しておくべきであり、次年度の活動が本プロジェクトにおいて最も重要な1年となるだろう。

次年度は、地域住民の熱が冷めぬよう、付帯設備の具体的なイメージを共有し、管理運用方法について地域住民との意見交換を進めていきたい。（佐藤充）

各種講演会



空き家活用プロジェクト

空き家の所有者と学生のマッチングを図りながら、実際に空き家を活用するプロジェクト。2023年に加藤ゼミと有志学生で立ち上げ、以下の流れで活動を進めている。

1 空き家の発掘

市内に空き物件を持っている方を対象に「空き家勉強会」を開催し、活用事例の紹介や個別相談会を実施。その後、希望する方と物件の見学会を行い、学生を交えて活用アイデアを考える。1回目は国のモデル事業として、国交省・山形市に協力してもらいながら開催し、約20人が参加した。

2 空き家の活用提案

所有者の意向や物件の状態を踏まえながら、空き家の活用案(企画・設計、収支計画・スケジュールなど)を検討して、所有者にプレゼンテーションを行う。現在、5つの物件で検討を進めている(シェアハウス2件、地域交流スペース1件、住宅1件、放課後スクール1件、ショップ&ギャラリー1件)。

3 実際の活用

実際に活用することになった物件の運用をサポートする。現在、5つの物件の内2件は、実際に学生が入居しながらDIYを行うことになった。

1年を通して、空き家の所有者からたくさんの悩みを聞いたが、「相続したが何からはじめて良いか分からない」「解体費が高くて困っている」という声が多かった。他方で、学生の中には「市外に住んでいて通学が大変」「リノベーションに興味があるが実践の機会がない」という声もある。このマッチングが上手くいけば、大きな投資をせずに空き家の活用が可能になる。仮に期間限定だったとしても、所有者には改修された物件と家賃収入が残り、学生には新しい暮らしと実践の機会が生まれる。「三方良し」の企画なので、引き続き活動を推進していきたいと考えている。(加藤優一)



環境的未来型 今野千恵氏

窓は建築の境界面であり、内部と外部を接続する部位でもある。窓のふるまいを研究した金野千恵氏は窓や建築の境界部分を工夫した住宅をつくる。活動の中で福祉法人と出会い、福祉法人を地域に開くために、敷地境界の壁を取り壊して、福祉を地域に開きつつ、福祉それ自体を良好な関係に保つ複合的な福祉施設である春日台センターセンターを作っていく。建築というハードがソフトをどう取り込むかの講演会であった。(竹内昌義)



環境的未来型 平本知樹氏

平本知樹氏は、デジタルテクノロジーを活かして、プロダクトから建築まで幅広いデザインを行う建築家だ。東京2020オリンピック・パラリンピックでは表彰台プロジェクトやオリンピック開会式のドローン演出等を担当し、飛騨高山ではホテルやウィスキー蒸溜所を手掛けている。国や言語、扱うテクノロジーを横断しながらプロジェクトを進めており、これからの時代における「建築家」という職能について考えさせられるレクチャーとなった。(加藤優一)

コンクール等受賞者の紹介



ワンデイプロジェクト 板坂留五氏

ワンデイプロジェクトとは、学年を超えてアイデアを競い合う1日勝負のアイデアコンペである。1年生から4年生まで名前を伏せて審査を行うため、1年生が最優秀賞に選ばれることもある。今年の出題・審査を担当したのは、板坂留五氏。東京藝術大学院を修了された後「RUI Architects」を設立、2021年には「Under 35 Architects exhibition Gold Medal」を受賞するなど、今をときめく建築家だ。板坂氏が出題した課題は「家の都合で住まいを考えてください」というもの。一見ただけでは分からないので、解説文も見てみよう。「家を自分とは自律した存在として捉え、考え方や感覚を持っていると解釈してください。しかし、あくまで建築物なので、勝手に動いたり育ったりすることはないです」。これを読んでも、困惑する学生が多かったのではないだろうか。そんな難解な課題で最優秀を受賞したのは、土岐柊哉の「氷山彷徨」という作品。海面上昇の影響で、海の上に暮らす人が現れた近未来を想定し、氷山のように海を漂い続ける建築を提案した。何処にたどり着くかは、波や風に触れている建築だけが把握しており、人間はそれに合わせて生活を送る。板坂氏の講評では「家の都合を感情ではなく自然環境に設定した点が面白い。それを受け入れる人間と家の関係に可能性を感じた」という評価をいただいた。

人間は、環境をコントロールすることで快適な生活を手にしてきたが、環境を受け入れることで生まれる豊かさもある。「家の都合」という詩的な課題設定でありながら、人間と環境の共存についても考えさせられるテーマだったと思う。(加藤優一)



講演中の板坂留五氏 (上)
「氷山彷徨」土岐柊哉 (下)

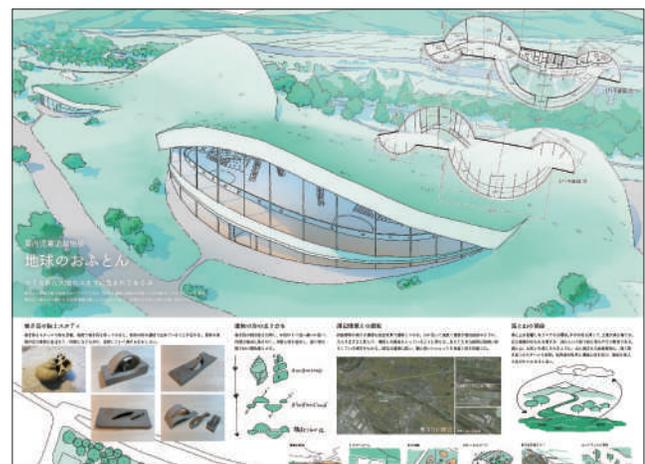
JIA東北建築学生賞

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- * 優秀賞「共鳴する図書館」 関根晃人
- * 優秀賞「地球のおふとん」 吉田葵葉

JIA東北賞で優秀賞を受賞した関根晃人の「共鳴する図書館」。学内に周辺の地域に開かれた図書館を作るという課題である。彼は大学の敷地に挟まれた小さな溪谷に図書館機能を点在させデッキで繋いでネットワーク化させた。自然とともにあるランドスケープが表現されているいい作品である。吉田葵葉の案は、大空間を構成する構造の課題である。構造家の木下洋介氏が寒河江で設計監理をしていることをきっかけに構造デザインの授業を受け持ってもらっている。「地球のおふとん」というかわいいうタイトルだが、シェル構造を2つ組み合わせ、その内部と外部に空間を作る意欲的な作品である (こちらも優秀賞)。

(竹内昌義)



優秀賞「共鳴する図書館」関根晃人 (上)
優秀賞「地球のおふとん」吉田葵葉 (下)

芸術工学会

主催 芸術工学会

＊ 奨励賞 「つながりが生み出す新たな歴史と街並みの継承

—秋田市新屋地区における魅力の認知とそれを活かした街づくり計画— 櫻井颯人
羽州浜街道の宿場町として栄えた秋田県秋田市新屋地区には、今でも多くの歴史的建造物が残されているが、若者たちが立ち寄ることは少ない。この研究では、アンケート・ヒアリング調査、魅力の分布調査などから、高校生は飲食店や放課後に勉強できる場所を、地域住民・団体は皆が集まりワークショップを開くことのできるスペースを求めていることを明らかにした。これらの結果から両者の思いを繋げるために、酒造会社の工場跡地をカフェや学習スペースとして新たな居場所を創り出し、さらに地元美大生の活動をサポートするギャラリーやアトリエとして利用するなどの具体的な提案に至っている。このような歴史的空間のポテンシャルを活かした街づくりに向けた緻密な調査と具体的で実践的な提案が、芸術工学会奨励賞に値するものと評価された。(山畑信博)



奨励賞 「つながりが生み出す新たな歴史と街並みの継承
—秋田市新屋地区における魅力の認知とそれを活かした街づくり計画—
櫻井颯人

第1回 タカカツグループ 学生住宅設計アイデアコンペ
宮城の家づくり2023

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

＊ タカカツ賞 「居久根とくらす」 松本みなみ 渡邊咲来

＊ 優秀賞 「SUPPLY BAUM」 佐々木禪

「地域循環住宅 —森と暮らす家—」という問いに対し、居久根(宮城県を中心とした地域の屋敷林)に着目し、生態系とそれに対応する暮らしをさまざまな視点による「循環」で解いていた作品は、審査員から高い評価をいただき、次点であるタカカツ賞を受賞した。以下、福屋粧子審査員長(建築家・東北工業大学教授)による講評。「森と、人の居場所が混ざった立体的なドローイングが非常に魅力的です。方向感をバラバラにして、多焦点的に表現してプレゼンテーション時の模型作成は大変だったと思いますが、ぜひ立体的に空間を作っていくことを続けて、独自の表現に繋げていってください。」 また、佐々木禪の地域で伐倒した木を薪に加工する工程と暮らしを結びつけた、「SUPPLY BAUM」が優秀賞を受賞した。(佐藤充)



タカカツ賞 「居久根とくらす」 松本みなみ 渡邊咲来 (上)
優秀賞 「SUPPLY BAUM」 佐々木禪 (下)

執筆活動

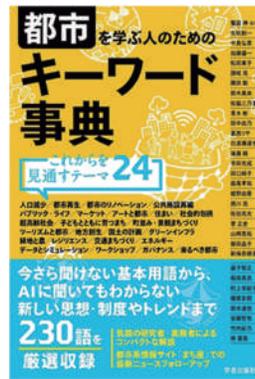


学芸出版社
2023年7月

銭湯から広げるまちづくり

ー小杉湯に学ぶ、場と人のつなぎ方ー 加藤優一

銭湯の常連たちがつくったシェアスペース「小杉湯となり」。銭湯のようにほどこい距離感で多様な暮らしが持ち寄られ、関わる人の主体性で居心地が保たれている。20～80歳の約50人による世代を越えた運営から、エリアの空き家を活用した拠点づくりまで、半径500m圏内の地域資源をつなぐ空間・組織・事業のヒント。(加藤優一)

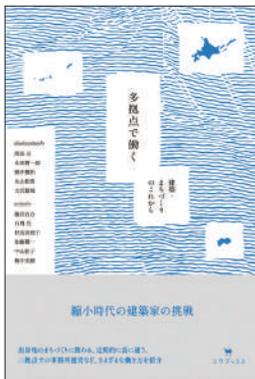


学芸出版社
2023年9月23日

都市を学ぶ人のためのキーワード事典

ーこれからは見通すテーマ24ー 編著：饗庭伸 著：加藤優一 他

都市をめぐる実務・研究に携わるなら押さえておきたい話題を、気鋭の執筆陣が24のテーマ・約230個のキーワードでコンパクトに解説。理念、政策、制度、手法、技術までバランスよくカバーし、言葉の世代交代やトレンド、テーマ間の関係がつかめる。関連データや事例、ニュースは都市系情報サイト「まち座」でフォローアップ中。(加藤優一)



ユウブックス
2023年9月15日

多拠点で働く ー建築・まちづくりのこれからー

編著：西田司 他 著：加藤優一 他

都市圏と地方を跨ぎ、活動する建築家や都市・まちづくりに従事する方が増えている。

出身地のまちづくりに関わる、二拠点で事務所を運営する、定期的に島に通うなど9組のさまざまな働き方を紹介し、縮小時代の建築家の可能性を探る一冊。

拠点の探し方や、地元へ溶け込む方法、事業の起こし方など多拠点で働くためのコツを紹介する。(加藤優一)



PLANETS
2023年12月5日

2020年代のまちづくり ー震災復興から地方創生へ、オリンピックから

アフターコロナー 編：宇野常寛 著：加藤優一 馬場正尊 他

本書は2010年代以降のこの国のまちづくりや国土運営についての議論を総括して、2020年代のまちづくりをどうするかを考える論集。まちづくりに関わるさまざまなプレイヤーや研究者が集結し、建築や都市開発から小商い、アートまで、多角的にこれからの都市や公共性について議論する。

(加藤優一)

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2023

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2023

発行日 2024年7月27日

編集 佐藤充 加藤優一 小野晃未

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 株式会社グラフィック

製本 株式会社グラフィック

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp



東北芸術工科大学
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000
Fax 023-627-2081
E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp